

青葉学園跡探索記、蛇体道・青葉谷遠し

——大滝周辺の鉾山と青葉学園の創設——

大滝会特別会員

鹿摩貞男

(万世大路研究会)

はじめに

青葉学園とは、国語学者・ローマ字教育学者として知られる三尾 砂氏（以下敬称略）によって戦後間もない昭和 21 年 6 月に設立された児童養護施設（私立小学校）である。その設置場所というのが、旧国道 13 号（旧万世大路）の大滝集落（福島市飯坂町中野）の西外れ旧西川橋付近を起点として旧茂庭村字梨平付近（現在摺上川ダム底）に至る蛇体道（林道、鉾山道路）を 6 km ほど進んだ山中の摺上川右支川烏川上流にあった蛇体鉾山（実は茂庭鉾山）の事務所跡であった。同地での存続期間は半年ほどで旧中野村大桁地区に移転しているけれども、その設置移転準備（引越し等）にあたっては当時の大滝集落の方々の献身的な協力があったと伝えられており、また万世大路を利用した施設設置ということでその整備効果の一つとしても考えることもできるとも関心のある旧跡である。今回その旧跡を辿ってみたので報告する。今回は、時間切れで学園跡まではあと一步の所で引き返し到達することは出来なかったけれども、蛇体道の現況に触れることができ実り多い探索行であった。

なお、関連する大滝周辺の鉾山と青葉学園創設の経緯について巻末「解説資料」に整理してみたので、関心のある向きにはご一読頂ければ幸甚です。

(以下「巻末参考図」を参照)

1. 西川橋に集合

平成 29 年 7 月 16 日（日）、旧西川橋のたもとに朝 7 時 30 分集合する(写真-1①②)。



写真一① 集合場所、旧西川橋付近(現道 2 代目西川橋直下、右側同橋基礎) dark-RX 様提供



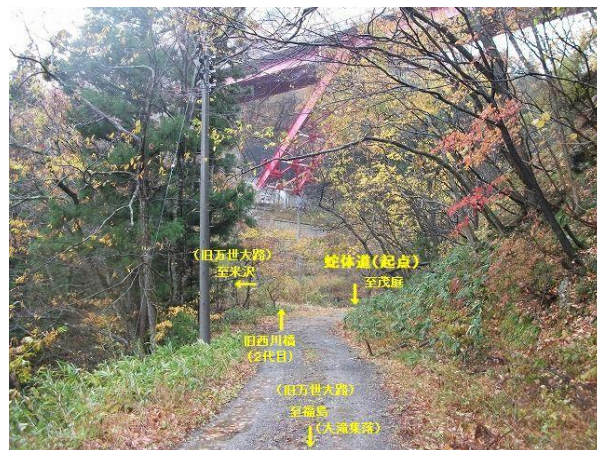
写真一② 写真奥(旧万世大路)蛇体道起点を望む。その右側(草むら)が 2 代目旧西川橋で米沢に至る。手前の道路は蛇体道。

天候は曇り、帰路午後からは結構な雨降りとなる。参加者は、山口屋散人さん、dark-RX さんと筆者の 3 名である。旧西川橋は、大滝集落の西端（旧中屋旅館渡辺家、鳳駕駐蹕之蹟設置箇所）

から 200mほど米沢側に行った所にあり現在車両で行ける旧万世大路の最奥となる(写真-1③、参考写真-1①)。



写真-1③ 大滝集落・渡辺家(旧中屋旅館)、
鳳駕駐蹕之蹟(明治 14 年 10 月 3 日明治
天皇小休憩箇所の記念碑)。
米沢側から望む。



参考写真-1① 旧国道 13 号(万世大路)旧西川橋
(2 代目、写真中央左に曲がった所)と
現国道 13 号 3 代目西川橋(写真上)、
集合場所はその直下。H241118

なお、単に大滝(或いは大滝集落)とっているのは、旧信夫郡中野村(現福島市飯坂町中野)の字長老沢(通称胡桃平)、字大滝、字葎沢の連続する三つ小字を併せた約 1 km の地域の総称で、昭和 54 年 5 月最後の住民が離村し現在は無人地域となっている。

大滝(集落)について詳しく知りたい方は、次のサイトをご覧ください(当大滝会 HP)。

<http://ootaki.xsrv.jp/wagaootaki.pdf> (「わが大滝の記録(PDF版)」)

また、要約版として次のサイトがあります(当大滝会 HP)。

<http://ootaki.xsrv.jp/130nenFormmemo.pdf>

(「『万世大路開通 130 周年記念フォーラム』パネルディスカッションメモ」、4 頁)

大滝集落・旧住民の方が「大滝会」(会長木村義吉、会員約 120 名)を組織し(昭和 54 年(1979 年)10 月設立)、旧大滝地区の環境の整備、氏神大滝山神社の管理などをおこなっている。また大滝会は、万世大路の観光化や沿線に点在する史蹟の発掘と保存を計ることを目的の一つとしている。今回の報告書作成にあたっては、大滝会木村義吉会長さんをはじめ役員の方々(高野英治・柁木新吉両副会長、渡辺チヨ役員他)から貴重なお話を伺っているが、個人名でなく大滝会談と略記している場合があるので予めお断りをおきたい。



参考写真-1② 2 代目旧西川橋、西川下流側から望む、右福島側、主桁はメタル(鋼製)。高欄(欄干)なし。
H230908 撮

【参考】西川橋について

旧西川橋は、実は2代目のもので高欄（欄干）がない（参考写真-1②）。

元の初代西川橋（木橋）にもなかったそうである。2代目は、旧万世大路には数少ないメタル（鋼）橋（簡易な組立橋梁か）であるがその架設時期は詳らかでない。地元大滝の方や当時の工事関係者（旧建設省職員）に伺ったが架換られたこと自体記憶にないと云う。これはあくまでも推測であるが、昭和38年6月に着工した東栗子トンネル工事に伴い旧国道13号（旧万世大路）が工事用資器材運搬道路となり、旧橋（木橋）のままではこれら工事用の重量車両に耐えることが出来ないために架換られたものと考えられる。

初代西川橋（木橋）は、L=15.5m・W=6.4m、施工時期：明治10～14年の間（旧木橋自体も架換られていると思われる）、2代目西川橋の架設時期は前述の通り不明で、諸元（橋長や幅員等）については旧橋台を利用していると思われるので初代に同じと思われる。集合場所の真上にある現国道13号の3代目西川橋（鋼橋）はL=98.8m・W=8.0m、昭和39年9月完成である。また、現国道13号に併行してはする4代目西川橋の東北中央自動車道（E13）新西川橋（鋼橋）はL=77m、W=10.5m、平成20年10月完成で、万世大路において3代にわたる現役橋梁がそろうのは当該西川橋が唯一の場所であろう。

朝8時前いよいよ出発となるがこれから上って行く山道通称「蛇体道」については知らない方も多であろう。それで、ある程度の予備知識を先に知って頂くほうが話しを進めるには良いと思うので、「蛇体鉱山」や「青葉学園」についての若干の説明をも含め前置きとしては少し長くなるが最初に整理しておきたい。ただし、蛇体道についての情報は限られており十分なものとはなっていないので予めお断りしておきたい。新たなる情報があればご教授のほどよろしくお願い致します。

2. 蛇体道と蛇体鉱山、青葉学園について

蛇体道について

我々が目的地として向かう青葉学園跡は前述の通り「蛇体道」の奥に設置されたものである。その「蛇体道」というのは旧信夫郡中野村（現福島市飯坂町中野）大滝を起点として、旧伊達郡茂庭村字梨平付近（現福島市飯坂町茂庭梨平、旧梨平集落は現在摺上川ダム底）に至る約17km（『福島県鑛産誌』昭和40年3月、福島県企画開発部開発課、88頁を参考に算出。以下『鉱産誌』と略記）の「林道」のことである。蛇体道の概略コースは、旧信夫郡中野村側は西川の左支川横川沿いに上って行き、クビト峠から下り坂で旧伊達郡茂庭村に入りはじめ鳥川右支川横川沿いに、途中横川を横断して摺上川右支川鳥川に出て、以降鳥川沿いに進んで茂庭村梨平に至るものである。

なお、ここで「林道」と我々が称しているのは、林野庁が定めている「林道規定」上の林道（幅1.8m以上の車道）に限るものではなく、歩道などを含め山中にある或程度の規模の道路を通称して呼んでいるのでお断りしておきたい。なお、河川の場合源流（上流）を背にして左側を左岸（左側から本川に合流する支川を左支川）、右側を右岸（右側から本川に合流する支川を右支川）と称する。

この「蛇体道」は、その正式な名称やどのような性格の道路であったのか公式の文献には接していないので不明であるが、鉱石運搬路として用いられたことはまず間違いない。明治41年の5万分の1地形図（關）によると、大滝から蛇体鉱山（茂庭鉱山）まで約6kmに小径（幅員1m未満）が表示されている。そこから下流へ約3km先鳥川沿いにあった八百沢鉱山までは小径の表示がなく途切れている。その八百沢鉱山から旧茂庭村字梨平（現在摺上川ダム底）までは小径が表示されている（手元にある昭和28年4月及び昭和44年3月発行の国土地理院5万分の1地形図（關）には同じ区間に小径が表示され途中途切れていて地形図に変化はない（以下旧地形図）。これは、八百沢鉱山の鉱石がおそらく茂庭梨平のほうに搬出されたと思われるのでそのような表示

になっているのではあるまいか。

蛇体道の現在の位置づけ(烏川林道、大滝第二線歩道、大滝線歩道)

さて、時代が下り手元にある平成14年12月発行の5万分の1地形図では蛇体鉾山と八百沢鉾山との間は道路(林道)が繋がっていて、蛇体鉾山(茂庭鉾山)から梨平集落まで道路(幅3~5.5m)が表示されている(平成17年6月摺上川ダム湛水終了(茂庭っ湖)、梨平集落はダム湖底となる)。この道路は、現在の「烏川林道」に当たるものと思われる。なお当該地形図では、旧地形図とは異なり大滝~蛇体鉾山間の道路表示は無くなっている。いずれもこれらの鉾山は戦前に閉山となっている。

最新の「森林計画図」(*)によれば「烏川林道」と称するものが現在、ダム湖の烏川河口を横断している付替市道烏川・名号線を起点とし、烏川沿い上流に向かって蛇体鉾山まで延びている。この林道は、恐らくかつての蛇体道を改修したものではないかと考えられる。烏川林道を梨平から蛇体鉾山へ烏川上流へと進み烏川右支川横川を横断するところに現在7号橋がある(参考写真-1③)。



参考写真-1③ 「烏川林道」林道橋7号橋梁、横川(本川烏川)に架かる。蛇体鉾山から約2.3km梨平側、八百沢から約0.7km大滝側の地点。
山口屋散人さん提供 H271027

ここから約1km手前茂庭側下流には烏川本川を横断する6号橋がある。その辺りの烏川の右岸に「八百沢鉾山」があったと思われ(『鉾産誌』では蛇体鉾山から3km下流と記されているので符合する)、6号橋付近からは八百沢歩道があり(「森林計画図」)鉾山への道路であった可能性が高い。

なお、「横川」と云うのがあちこちにあり紛らわしいけれども、それぞれ本川名を付すこととしていたので留意されたい。

(*) 森林計画図：関東森林管理局の「阿武隈川森林計画区第5次国有林野施業実施計画図(平成26年度樹立)」(2万分の1。以下「森林計画図」)

ところで、蛇体鉾山~八百沢鉾山間(L=3km)の道路が旧地形図上に表示されていないとしても、かつて大滝から梨平までは蛇体道が繋がっていたことは確かである。次のような証言がありまた他の大滝の方々も茂庭梨平まで繋がっていたと語っている。

「この道は明治30年代から大正初め頃にかけて採掘された蛇体銅山の鉾石運搬道として開鑿されました。蛇体鉾山閉鎖後、大正から昭和初期頃は山菜採りやキノコ(松茸・舞茸)狩りが盛んに行われ、この道を蛇体から茂庭まで山菜を採取して歩き、茂庭集落で一泊して翌早朝、当時は東北一の温泉地として大いに繁盛していた飯坂温泉に下りて旅館に山菜を売りさばき現金に代え、万世大路を通過して大滝集落に戻ったと祖父から聞いたことが有ります」(大滝会 HPより)。

かつて蛇体道であったと思われる蛇体鉾山から茂庭梨平までの道路は現在「烏川林道」になっていると考えられることについては前に述べた。それでは、大滝から蛇体鉾山までの蛇体道は現在どのような位置づけになっているかみてみよう。今回踏破した大滝~クビト峠間(約L=3.5km)の蛇体道は、前述の通り明治41年5万分の1地形図(關)に表示されており、たまたま手元にある昭和44

年3月発行の旧地形図（関）にも表示があるけれども、平成14年12月発行の5万分の1地形図では道路の表示は無くなっている。しかし、今回その山道を我々は曲がりなりにも通ってきたわけで現実には存在している。前に紹介した「森林計画図」には、森林管理局（関東）所属の歩道「大滝第二線」として表示されているものがあって、それが我々の云うところの蛇体道だと思われ、蛇体鉦山からのかつての鉦石運搬路だったものであろう。「大滝第二線」歩道は、前述の国土地理院旧地形図に表示されていた小径（蛇体道）に概ね一致するように思われる。もっとも起点側は民有林なのであろうか約0.6km分については道路の表示がない。現地には勿論山道がある。

クビト峠から先については、国土地理院の5万分の1旧地形図では蛇体鉦山まで約2.5kmについて引き続き小径（蛇体道）が表示されていて、前述の通りその先には表示がない。「森林計画図」では、クビト峠から先は森林管理局所属の「大滝線」歩道として表示されている。しかし、横川（本川烏川）を渡河し峰筋に出たところで（後述の「青葉峠」付近か）、旧地形図上の蛇体道はそこから左に折れて急坂（地元の方は七曲と称している）を烏川の方に下って右岸の蛇体鉦山（その川向、左岸側に青葉学園跡）に出るけれども、「大滝線」歩道のほうは峰筋をまっすぐ横川（本川烏川）に沿って北へ進み烏川林道に到達した所が終点となっている（7号橋と蛇体鉦山のほぼ中間辺り）。なおクビト峠は、大滝～蛇体鉦山間の蛇体道のやや旧茂庭村よりではあるがほぼ中間に位置し文字通りの峠で大滝から峠まではずっと上り坂が続き、そこからは下り坂になる。旧信夫郡（中野村）と旧伊達郡（茂庭村）の郡境でもあった（両村とも現在は福島市飯坂町）。

後述するけれども今回探索行の最終到達点は、クビト峠から約0.8km北へ進んだ横川（本川烏川）の渡河箇所、この場所は、「旧地形図（5万分の1）」の蛇体道（小径表示）の渡河箇所、「森林計画図（2万分の1）」の「大滝線」歩道の渡河箇所ともほぼ一致するようである。

過去の状況

次に、この蛇体道の過去状況と幅員であるがこれも公式の文献にはほとんど接していないけれども、地元大滝会の木村義吉会長ほか皆様の話しによれば2m前後はあったようである。実際の今回の探索行で現地を見るとほとんど1m以下の感じではあるけれども、場所によっては2m前後のところも見受けられる。鉦石運搬路として、牛の牽く土櫓^{ひどそり}によってもおこなわれたそうであるから（大滝会談）、かつてはそれなりの広さと良好な路面であったものと推察される。青葉学園創立時の蛇体道の状況について次のように記されている。

「蛇体に銅鉦山があった時代には、鉦石を詰めたかますを人の背で大滝まで運んだ。従ってその道はそれなりに良い状態に保守されていたと思われる。」（『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』（平成8年6月、社会福祉法人青葉学園）22頁、以下『50年史』と略記）。

また、青葉学園が開設されて間もなく昭和21年7月に福島民報の高橋重夫記者（後、青葉学園理事）が蛇体の学園を訪れているけれども大滝から2時間ほどで到着している（『50年史』69頁）。案内人もなく初めての約6kmの山道でもその程度の時間で走っているのだから、道路（蛇体道）はそんなに貧弱なものでは無かったはずである。地元大滝の方々も山歩きはお手の物であったろうが1時間半もあれば蛇体鉦山（青葉学園）には楽に到着したということである。クビト峠まで（約3.5km）は小1時間で行けたそうで、今回我々は2時間半かかっている。当時の蛇体道がかなり良い山道であったであろうことが推察される。

蛇体道の補修工事

『福島土木監督所五十年史』（昭和 30 年 5 月 1 日、福島県）の中に興味深い記事があったので紹介しておく。福島土木監督所（M38.7.18～）は、後に福島土木事務所（S30.9.8～）となり福島建設事務所（S44.4 機構改革）に名称変更、現在の県北建設事務所（H6.6～）のことである。「昭和 26 年度施行市町村補助工事」として、おそらく我々がいうところの「蛇体道」であるとするとの文書に表示されたものとして唯一と思われるが下記のような砂利道補修工事がおこなわれているようである。

路線名：長老沢・蛇体 工事箇所：中野村字長老沢 工種：道路砂利補修

工事内容：B型延長 4,350m 路側工 1,573m 幅：2.5m 着手：S26.11.15 竣功：S27.3.31

予算額：1,050,000 円 決算額：1,050,000 円 （186 頁、一部加筆）

これは、どうみても蛇体道の補修工事であろう。長老沢（旧西川橋付近）から蛇体（旧蛇体鉾山、旧青葉学園）まで砂利敷（幅員 2.5m）を実施している（B 型というのは砂利敷のやり方を示すと思われるが不詳）。また、路側工も実施されているけれども、詳細は不明であるが崩れていた路肩部の整備等をおこなったものであろう。長老沢・蛇体間の距離は約 6 km と考えられているので、若干足りないけれども渡河部は除かれるであろうし、砂利敷の不要なところもあったのかも知れない。市町村補助事業となっているが、事業主体は県であると思われる。クビト峠から蛇体までは茂庭村に属し中野村と二村に跨がっているので福島県に於いて施工したと考えられる。

ところで、昭和 26 年になぜ本工事が実施されたのかは全く分からない。青葉学園は既に引越をしているし、茂庭までの通路を確保する理由もないと思われる（蛇体～茂庭村梨平間の砂利敷はない）。想像が許されるとすれば、昭和 25 年（1950 年）6 月に勃発した朝鮮戦争による特需景気に呼応し蛇体鉾山の再開でも企図したものであろうか。おりから、昭和 24 年には当時の通商産業省が鉱業政策の基本構想を決定して銅鉾石など地下資源の合理的開発利用（既存鉾床の探鉾など）を推進しようとしていた時期にあたる（JOGMEC Web サイト『銅ビジネスの歴史』2006.8.1）。

蛇体(じゃたい)の表示と「蛇体鉾山」について

ところで「蛇体道（じゃたいみち）」と我々は呼んでいるけれども、これは古くから地元大滝の皆様が呼び習わしていることなのである。蛇体鉾山に行く道路ということでそう呼ばれたものであろう。となると茂庭梨平側からの道路の呼び名としては八百沢鉾山へ行くためのものなので「蛇体道」と云うのは不適切で別の呼び名があったのかも知れない。しかし、便宜上大滝～梨平間全線に亘って本稿において蛇体道と呼ぶこととしたい。

「蛇体」については蛇体鉾山の位置が旧茂庭村「字蛇体」にあったことから名づけられたものであろうが、『福島の小字』（昭和 58 年 3 月、福島市史編纂委員会）によればその字名は「蛇タイ」と表示されていて「蛇体」とはなっていない。当該書物の出典史料の一つである明治時代初期の『地積図（茂庭村）』（福島県歴史資料館蔵）でも確認しているが字名は勿論「蛇タイ」となっており、「体」と云う文字は使用されていないことから「タイ」には「体」とは違う意味が元々あったのかもしれない。しかし、そのヨミからいつの時代からか「体」の字が当てられ「蛇体」になったものであろう。地元大滝の記録誌『わが大滝の記録』（昭和 52 年 1 月、編集委員会）の中に

も「蛇体鉦山」(7頁)とあるので昔から用いられていたことは確かである。

さて、その「蛇体鉦山」のことであるが『鉦産誌』によれば「蛇体鉦山」という名称の鉦山は存在しないようである。蛇体鉦山(茂庭鉦山)は銅(Cu)鉦山で金(Au)や銀(Ag)も産出していたようである。後で詳しく触れたいと思うが若干整理しておきたい(「別添解説資料参照」)。我々が蛇体鉦山と呼んでいるところは、『鉦産誌』の記述にある位置関係から実は「茂庭鉦山」と記されているところのようである(88頁)。当該書物は、鉦業関係行政の衝にあたる福島県企画開発部開発課(当時、現在後継組織商工労働部企業立地課)の編集になるものであり、記述されている「茂庭鉦山」と云うのが正式名称なのであろう。このなかでは、採鉦坑道として「栄坑」「蛇体坑」「作坑」の3箇所が挙げられている。しかしその位置の具体的な場所は分からない。このうち蛇体坑は、我々が「蛇体鉦山」と云っている場所のように思われる。前述のように蛇体道の青葉峠を越え急坂を下り(地元の方は七曲と云う)烏川右岸沿い下流の方へ向かうと間もなく右手の斜面に少し平になったところがあり坑道が見えると大滝の方から伺っている。そこを蛇体坑或いは蛇体鉦山と地元の方は云っていたようであり、当該箇所の字名はまさに「蛇タイ」である。そこで、正式名称は茂庭鉦山なのであろうが、地元大滝の方も昔から通称名で「蛇体鉦山」(『わが大滝の記録』)と云っているので、我々もそれにならい引き続き「蛇体鉦山」(茂庭鉦山)と呼ぶこととする。逆に云うと大滝の方によれば「茂庭鉦山」と云うのは聞いたことがないそうである。

青葉学園発祥の地(今回探索の目的地)

さて、その蛇体坑の辺りには平地がなく、従って鉦山事務所或いは作業員宿舎(飯場)は烏川の川向の比較的平坦な所に設けられていたようである。閉山後3年ほど経っていたようだが(『50年史』70頁)その事務所建物はまだしっかりとしていたので、これを教室と住まいにして昭和21年6月青葉学園(児童養護施設、私立小学校)がその地に開設されたというわけである(前掲書23頁)。詳しくは後ほど触れる(「別添解説資料参照」)。そこには旧鉦山の畑もあり、良い野菜が収穫できたそうである。その場所は「川の州で土が肥えていた」(前掲書57頁)という。当該箇所の200~300m下流に烏川左支川^{かれまつざわ}枯松沢が合流していることから付近もかつては川の氾濫原だったのかも知れない。また、青葉学園(旧鉦山事務所跡)の住所については、『50年史』では「茂庭村蛇体」としながらも、必ず「俗称」と注書きしているので、正式には「蛇体」ではなかったことを知っていたと思われる。烏川の右岸蛇体坑のある方が字蛇体(蛇タイ)であり、川向の学園のある方は「字枯松沢」になっているようだ。もっとも、この蛇体と云う地名は気に入らないのでそれに替え付近一帯を「青葉谷」と命名、学園の名称を「青葉学園」(住所は「中野村大滝青葉谷」と称す)としたと云う。また、蛇体道の青葉学園の見えるところを「青葉峠」と命名した。みんなの姓も青葉姓とし名前呼び合い全員青葉家の家族になったのだと云う(『50年史』)。青葉学園跡には今回到達出来なかったけれどもとにかく辺り一帯目に見える限りこの季節青葉一色、青葉の海で「青葉学園」を実感してきたものである。

なお、我々の探索は、結果的にこの青葉谷を目指したものである。青葉谷を本稿の題名の一部としたものである。

3. クビト峠へ

さて、前置きが大変ななくなったが蛇体道・青葉学園跡へ出発する（朝 7 時 55 分）。蛇体道の入り口は、今年平成 29 年 11 月 4 日開通、供用開始を目指す東北中央自動車道(E13)新西川橋の真下になる(写真-1④)。



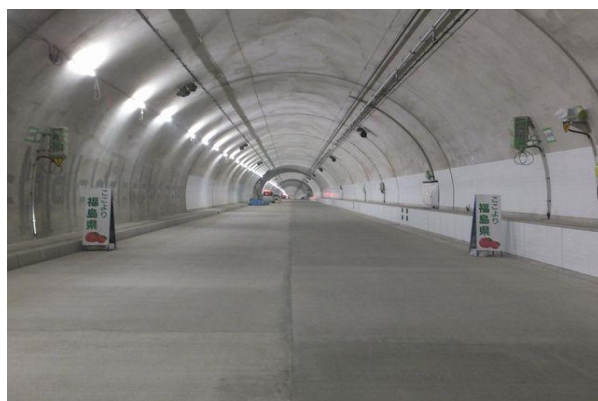
写真-1④ 蛇体道入口付近。国道 13 号3代目西川橋真下から望む。見えている橋梁は東北中央自動車道、新西川橋(4代目)で背後は工事用の仮橋。この後しばらく藪こき。

この新西川橋に連続して無料で通ることの出来る自動車トンネルとしては日本最長の新栗子トンネル(仮称。L=8,972m、W=9.5m。H27.3 完成)がある(参考写真-2①②)。

新西川橋橋上からは蛇体道(起点及び終点方向)が見える(参考写真-2③④)。



参考写真-2① 東北中央自動車道(E13)新西川橋(4代目)橋上から新栗子トンネル(L=8,972m)福島側坑口を望む(右は避難用トンネル)。H290629



参考写真-2② 新栗子トンネル内県境付近。福島県側を望む(福島県分 L=5,417 m、山形県分 L=3,555m)。設備工事が急ピッチで進行中。



参考写真-2③ 新西川橋(4代目西川橋)から蛇体道起点側(左側)を望む。藪こきを終えたところ。上の赤い橋は現国道 13 号、3代目西川橋。H290525



参考写真-2④ 新西川橋から蛇体道(右側林の中)クビト峠方向を望む。左側奥が西川本川、右側が左支川横川(クビト峠が源流) H290525

【参考】E13（東北中央自動車道 路線番号）

遅まきながら日本の高速道路においても路線名と共に路線番号を付して案内する高速道路ナンバリングを導入することとなった（国道企第55号、平成29年2月14日付け 道路局長（国土交通省）通達 各地方整備局長・各都道府県知事等宛）。今回の**東北中央自動車道(国道13号関連)の路線番号はE13**、因みに東北自動車道（国道4号関連）はE4、磐越自動車道（国道49号関連）はE49などである。高速道路のナンバリングに当たっては既存の「国道番号と整合を図る」と云う考え方にに基づき「地域でなじみがある、かつ、国土の根幹的な路線の既存の国道番号を活用」しておこなったという（「高速道路ナンバリングの実現に向けた提言」（平成28年10月24日、高速道路ナンバリング検討委員会とりまとめ）。なお、一般国道等と区別するため、数字の先頭に、高速道路（Expressway）を意味する「E」を付けたものを高速道路の路線番号としたものである（「同提言」）。高速道路の路線番号は主要な欧米諸国では古くから実施されている（参考写真-3①②③）。



参考写真-3① フランスパリ郊外高速環状4号（国道N104）、調査をしたセーヌ川橋梁たもとの案内標識。ナンバリングされた高速道路（Autoroute）A6・A13、A10の案内がされている。手前裏側標識はセーヌ川案内。H12（2000年）1011



参考写真-3② フランスパリ郊外高速環状4号（国道N104）、調査をしたセーヌ川コンクリート橋梁L=200m（補修工事中）。「平成12年度欧州におけるコンクリート耐久性向上施策状況調査」。セーヌ川の標識が面白い。



参考写真-3③ 「一般道路上の案内標識における高速道路の表示方法の変更例示」（道路標識、区画線及び道路標示に関する命令、昭和35年総理府令・建設省令第3号）平成29年2月7日改正公布、2月14日施行

我が国において国道を番号で呼ぶこととなったのは、明治18年（1885年）1月6日付け太政官布達第1号（太政大臣公卿三條實美、内務卿伯爵山縣有朋名）に基づく内務省告示第6号別表（明治18年2月24日付け）によるものである。因みに陸羽街道筋が国道6号（のちに旧道路法で国道4号）、万世大路（羽州街道）筋が国道39号（のちに同じく国道5号、新道路法で現在の国道13号）などである。この時の内務省土木局長が元山形・福島県令（県知事）であった三島通庸である。彼自身の発案であったかは詳らかではないが、いかにも彼らしい斬新な道路行政の試みと云えるであろう。

蛇体道の入り口はブッシュになっているけれども新西川橋辺りからは少し良くなって来る。新西川橋のとなり（奥、北側）には工事用の仮橋（作業架台）が設置されていて蛇体道からは工事中的の新栗子トンネルの避難坑（避難用トンネル）が見える（写真-1⑤）。



新西川橋をくぐり数分進むと道は左に折れ最初の小さな沢を横断する。その場所はほとんど道がない状態で崖の上を歩いているような感じで、下の方には草木もなく滑り落ちたら大変だ（写真-2①②）。

写真-1⑤ 新西川橋と工事用仮橋をくぐり抜けると蛇体道から東北中央自動車道新栗子トンネル避難坑を望むことができる。



写真-2① すぐに左に曲がる。
dark-RX 様提供

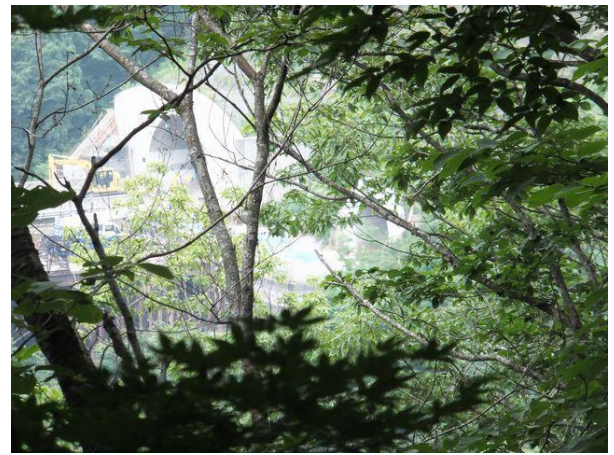


写真-2② 最初の沢(小)越え。西川橋から10分。
dark-RX 様提供

出発から30分ほどの所に2番目の小さい沢があり横断する。水流はほとんどなく山側は大きくて真っ黒な岩盤で涸滝^{かいたき}の状態であるが雨でも降れば見事な滝になるのではあるまいか。黒い色は水質に何かの成分が含まれている影響かも知れない（写真-2③）。この2番目の沢を越えて上りきると左手の林の中に新栗子トンネルの福島側坑口が見えてきた（蛇体道0.8km付近、距離は携帯電話（簡易距離計）によるもので目安程度のもの、以下同じ）。季節的な要因（青葉の季節）もあるのかも知れないけれども、起点付近は別として蛇体道から東北中央自動車道（E13）の工事現場を見ることができたのはここが唯一の場所であった（写真-2④）。



写真一2③ 2番目の沢(小)越え。出発から約30分。



写真一2④ 蛇体道 0.8 km付近から新栗子トンネルを望む。

1時間ほど歩いたところで3番目の小さな沢が横断していて、そこで最初の小休憩を取った(蛇体道約1.1km)。これ以降の蛇体道は幅も結構広く平坦で良好な路面状態が林の中に数百メートルほど続きかつての鉱石運搬路を彷彿とさせるものであった(写真一3①~④)。



写真一3① 蛇体道 1.1 km付近。出発から約1時間、小さい沢で最初の小休憩。標高約 510m。



写真一3② 小休憩箇所から、蛇体道茂庭方面を望む。かつての鉱石運搬路を彷彿とさせる。山側が少し崩れているがかつてはしっかりした道になっていたであろう。



写真一3③ 小休憩箇所から数百メートル箇所を進む。



写真一3④ 蛇体道 1.4 km付近、少し開けてきてヤマアジサイなどが群生。山口屋散人さん提供。

少し開けたところに出るとヤマアジサイやイワウチワが群生し珍しい山野草を見ることができた。イワウチワは花期が過ぎた後で残念であったけれども開花時期にはさぞ見事なお花畑を見ることが出来たであろう(写真-4①~④)。



写真-4① ヤマアジサイ(山紫陽花) dark-RX 様提供



写真-4② イワウチワ(岩団扇)。花期終了後。



写真-4③ トリアシショウマ(鳥足升麻)



写真-4④ キクバオウレン(菊葉黄連)、薬草(胃腸薬)



写真-5① 鞍部西側を通過(蛇体道 1.9 km付近 約1時間半)。

さらに30分ほど歩いて行くと、地形図上で鞍部^{あんぶ}の西側と思われる所を通過する(旧地形図では朴沢地区から長老沢沿に上る山道との合流点と思われる)。そこは蛇体道1.9km付近(約1時間半)と思われる(写真-5①)。

地形図上では一見峠のような感じではあるが、この後も上り坂が続くので峠とは言い難い。

ここを過ぎるとすぐに見事な赤松の原生林がある(写真-5②③)。樹齢など見当もつかないけれども100年くらい経っているものもあるのではないだろうか。樹高も高く30~40mはあるだ

ろう。なおこの辺りには確認は出来なかったけれども、蛇体道から上流側に向けて坂路があるようで少し下りたところに、「末松鉦山」と大滝の方が呼ぶ銅鉦山があったという。



(左写真)写真-5② 赤松原生林、この辺りに末松鉱山があった(上流側へ向かう坂路があり少し下った所)。



(右写真)写真-5③ 赤松原生林林 (樹高 30~40m超か)。

かつては、蛇体道からも鉱山が見えたということであるが『鉱産誌』にはその名は見当たらない。これは想像であるけれど茂庭鉱山(蛇体鉱山)の鉱石運搬路途上なので、その採鉱地の一つとして露頭掘りでもしていたのではなかろうか。その採鉱期間はかなり短いものであったようだ。その名称末松も松林の中に鉱山があることと関係があるかも知れない。

見事な赤松林の景観に癒やされながら30分ほど進むと深くて大きな沢の源流が見えてきた。その先クビト峠の手前にも同様の沢があった。これらはいずれも横川(本川西川、旧中野村側)の源流の一つと考えられるけれども、あまりにも沢が深く横川そのものは確認出来ない(写真-6①②)。



写真-6① 赤松林から30分ほどの所の深い沢。横川(本川西川)源流の一つであるが横川は見えない。



写真-6② クビト峠手前の深い沢(横川(本川西川)源流の一つ。沢は左下にはるかに続く)。

今まで通って来た山道はかつての鉱石運搬路蛇体道であることは間違いなく「森林計画図」(森林管理局)で称している「大滝第二線歩道」であると考えられる。

さて、出発から約2時間半(約3.5km)、10時半過ぎ漸く「クビト峠」(標高約730m、地形図より)に到着した(写真-7①~③)。



写真一7① クビト峠(旧信夫・伊達郡境)、
標高約 730m。旧中野村側(営林局
「大滝第二線歩道」)から望む。



写真一7② クビト峠から大滝(旧中野村)側を望む。
写真 7-①からの眺望。
dark-RX 様提供



写真一7③ クビト峠、旧茂庭村側から旧中野村側を
望む。

このクビト峠のことであるが実はよく分からないのである。国土地理院地形図はもとより「森林計画図」(森林管理局)等の図面にも峠名の表示はなく、記載されている書物もほとんど見当たらない。クビト峠を取り上げている書物と云えば『50年誌』くらいのものであろう。大滝の方によれば、前述の通り蛇体道というのは昔から呼ばれている名称でありその一番高い峠箇所が通称「クビト峠」と云っている場所であるという。大滝側からそのクビト峠まではずっと上り坂であり、その峠から下り坂になるとのことである。その箇所は、旧信夫・伊達郡境 (S28. 4発行5万分の1で確認) でもある。このことから、今回我々がクビト峠と認識している場所は間違いないと思っている次第である。

【参考】クビト峠と青葉峠

(『50年史』には地形図の掲載があり「クビト峠」及び学園側で名づけたところの「青葉峠」の表示があるけれども (15頁)、実際は「青葉峠」とされているところは「クビト峠」であり、「クビト峠」とされているところは前述の鞍部箇所 (写真一5①参照) であると思われる。同書によれば、青葉峠から「オーイ」と呼ぶと川向の青葉学園 (蛇体鉦山事務所跡) から「オーイ」と返事があったという (68頁)。青葉学園と青葉峠は指呼の距離だったので、同書地形図のように離れていないと思う。「青葉峠は学園の人達が蛇体の谷から上がった所を、通



参考写真一4 クビト峠 青葉学園様提供
(『五十年史』)

称として呼んだもの」のようで、半年間の通用であったことから地元大滝の方は聞いたことがないと云っている。また同書には「クビト峠」の写真が掲載されているけれども（19頁、**参考写真-4**）、本稿の**写真-7②（クビト峠）**に酷似しており、今回我々が到達した所がクビト峠であることは間違いない。

ところで、「クビト峠」と云う何やら曰く因縁のありそうな地名には何か謂われがあるのだろうか。現在の大滝会の方々にお伺いしてみたけれども特に聞いたことがないというご返事であった。しかし、その因縁めいた話しを『50年史』に見つけたので一応紹介しておきたい。これは斎藤乙次郎にまつわるものである。乙次郎は大滝集落の方で青葉学園の創立期から他界するまで（昭和61年（1986年）学園の為に相当ご尽力された方）のようで、『50年史』（平成8年6月発行）は大部の書物ではあるが9頁に亘って乙次郎を顕彰しておりこれは異例の扱いと云えるだろう。クビトの因縁話の概要はつぎのようである。乙次郎の話しとして家族（長女）が伝えていることである。

「ここに松の木があつて、乙次郎はここを通過する時には、ちきしょうーと何度も大声をあげながら縄を激しく振り回した。これはこの峠の地縛霊がとりつくことを防ぐためであった」（19頁）という。

前述のように大滝の何人かの方に前記のような話しを聞いたことがあるかお尋ねしてみたけれども皆さん聞いたことがないということであった。乙次郎自身が特異な能力を持っていたものであるか、或いは寂しい山中のことであるから自分自身を鼓舞するための儀式としておこなっていたものか真相は分からない。また、「クビト」の漢字表記について「クビト」は首人と書くとの説もあるがさだかではない。（19頁）ともあり、大滝の方に確認したけれども昔から漢字表記はされておらず「クビト峠」と表記していたようである。本稿もそれに倣うこととする。

3. 青葉谷へ ——青葉学園(跡)遠し、青葉谷に到達せず——

このクビト峠までは山口屋さんも以前来たことがあるそうで、これ以降は未知の世界であるとのことである。大滝からクビト峠まではほぼ推定通りの道筋であった。これ以降の蛇体道は、筆者の推定によれば横川（本川烏川、旧茂庭村）の源流を回り込んで烏川へ出るというものであった。これは明治41年地形図からの推定で、鉱石運搬路のようなものが沢を渡河して行くというのは不自然ではないかとの先入観もあり、昭和28年地形図では明確に横断（渡河）していたものの、2万5千分の1地形図（平成13年3月）に蛇体道の推定線を記入する際に回り込むようにしたのであるが後述するように誤解していたようだ。勿論明治41年地形図もよく見れば横川を横断（渡河）している。

さて、クビト峠に出るとすぐほぼ正面（南西方向）に山腹が見える。これは、かつての郡境となる778m峰へ繋がる峰筋と思われる。筆者の推定では、前述のようにその山腹を回って烏川へ出る道があるのではないかというものであった。正面の山に上り山口屋さんなどが一所懸命搜索してくれたが勿論見つかるはずもない**（写真-8①）**。

このクビト峠からは、後に詳述する北へ向かう5万分の1地形図の蛇体道（「森林計画図」の「大滝線歩道」か）と「大滝第一線歩道」（「森林計画図」）というものが旧中野村（信夫郡）・旧茂庭村（伊達郡）境の西川山（778m峰の先）のほうへ向かって表示されている。森林の林班（森林管理のための区画の単位）の堺に沿っていて旧郡堺のようであるが、現地ではそれらしきものがある



写真一八 ① クビト峠から西南側の山(778m峰の峰筋)を望む。山道のような感じに見えるのは「大滝第一線歩道」か。蛇体道は見つからず。回り込んで字縫之助(蛇体の上流側)に出ることもあったという。

ものの、山道のようなそうでもないような感じで確認は出来なかった(写真一八①参照)。その他に地元大滝の方によれば、クビト峠から「ワサビ沢」(字名、旧茂庭村)へ向かう明確にそれと分かる山道があったはずだとのことであるがその「大滝第一線歩道」のことかも知れない。また、クビト峠からは、烏川沿い蛇体の上流側に位置するぬいのすけざわ縫之助沢(字名、旧茂庭村)に向かう山道もありゼンマイ取りに行く時に使用したということである。いずれにしてもクビト峠はかつて交通路の要衝であったようだ。

蛇体道に話を戻す。クビト峠前面の山を回り込むような山道はそういうことで見つからなかつたけれども、北側に続く峰筋の中腹を下って行く結構立派な山道があるのが確認された(写真一八②③)。



写真一八 ② クビト峠北側(旧茂庭村側)の下り坂の山道(蛇体道と思われる)。



写真一八 ③ クビト峠北側の下り坂は蛇体道であろう(森林管理局「大滝線歩道」か)。比較的平坦、茂庭側を望む。

これほどの道は他に見当たらず蛇体道以外には考えにくく「森林計画図」に表示されている「大滝線歩道」に相当するものではないかと思われる。その蛇体道らしき山道をクビト峠から数十分ぐだった所にひのき榎林があり道路脇に榎の大木がある(写真一八④⑤)。



写真一8 ④ クビト峠から数百m(約 40 分)地点の松林(松の大木)。まっすぐ下りる道と左側の山道と、どちらを行くか。ここから急坂となる。



写真一8 ⑤ 松の大木箇所を下から望む(クビト峠側を望む)。写真中央が蛇体道。

そこまでは比較的平坦な道であったが以降勾配がきつくなる。そこではまっすぐ北に向かう道と左側に曲がり沢(横川(本川烏川、旧茂庭村)の源流と思われる)へ下りていく山道があった。最初その沢への道を行ってみたのであるが沢で途絶え対岸も崖で道らしきものは見当たらず引き返す。松の大木箇所から下りていくと数分で沢(横川源流であろう)に遭遇、そこを渡河し沢筋に続く山道を進んだ。この後何となく道らしき沢筋をくだったり渡河したりして進んで行っただけでもその道もはっきりしなくなってきた(写真一9①②③④)。



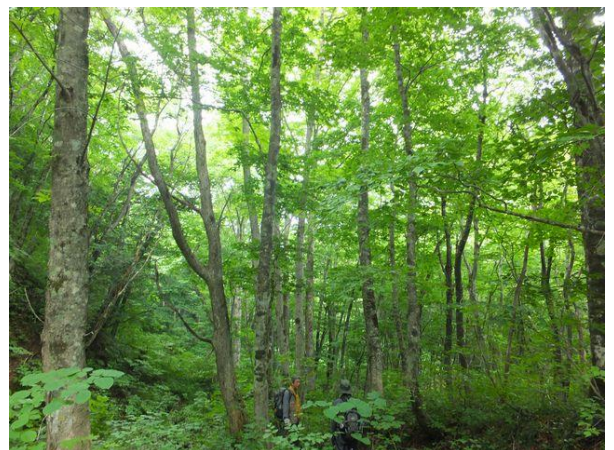
写真一9 ① 横川(本川烏川、旧茂庭村)と思われる沢の渡河地点。dark-RX さん提供



写真一9 ② 渡河箇所(左岸)から続く山道(蛇体道?)



写真一9 ③ 2 回目渡河箇所、右岸から望む。左岸に続く山道(蛇体道?)



写真一9 ④ 山道もはっきりしなくなった。鳩首会談「どうすっぺ」。進行断念、引き返す(12:15)。起点から約 4.5 km(約 4 時間)、クビト峠から約 1.0 km弱(約 1 時間半、途中寄り道含む)。

時間はもう12時を過ぎている。昼食時間を入れると戻るには3時間はかかる。あと一步のところ
で残念であるけれども限界である。12時15分、ここで引き返すこととする。クビト峠からは1km弱
(出発点からは約4.5km)、寄り道しながら考えながら進んだこともあり1時間半かかっている(写真
-9⑤)。



写真-9 ⑤ 青葉学園 軌跡(到達箇所付近)。
山口屋散人さん提供)

ここクビト峠手前の蛇体道で昼食を取る。この頃は、雨も結構強くなってきたけれども、良く茂
ったブナ林のお陰でほとんど地上には雨が届かずそんなに濡れることはなかった(写真-10①②)。

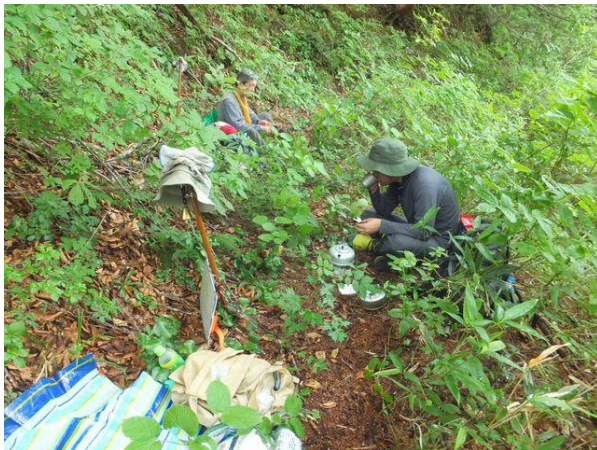


写真-10① 蛇体道にて昼食、クビト峠手前。
結構な雨降りとなってきたが枝葉の茂る
樹木のお陰でほとんど濡れない。
山中のあったかい味噌汁はおいしい。
山口屋さん、有難う。



写真-10② 旧茂庭村側蛇体道(営林局「大滝線
歩道」か)、昼食箇所から少し進んだ
ところからクビト峠を望む。

青葉谷、青葉学園(跡)には到達出来なかったけれども有意義な探索行であったと思う。大滝の
方々の話によればクビト峠を越えてからは、松林をぬけて横川(本川烏川、旧茂庭村)を横断して
進んで行くと烏川に出て蛇体鉦山(跡)を見ることができると後日確認しており、我々の進んだ道
はほぼ間違いなかったものと云えるだろう。しかし、蛇体道については折に触れ大滝の方々にお伺
いしていたところであるが、今回行く前にもう少し具体的なお話を聞いておけば良かったと思っ
ている。旧鉦石運搬路ほどの道である、簡単に行けるものと筆者は考えていたけれども少し甘かつ
たようだ。

おわりに

出発点西川橋には午後3時半に戻った。歩いた距離は寄り道を含め往復約10km程度であったと思う。次回は、青葉学園跡に到達してみたいものである。

常々蛇体道の探索をお願いしていて今回時間を割いて案内して頂いた山口屋散人さん、心強い随行者dark-RXさんには現地において大変お世話になり、また帰宅後は貴重な写真をご提供頂きました。厚く御礼申し上げます。次回もまたよろしく願いいたします。

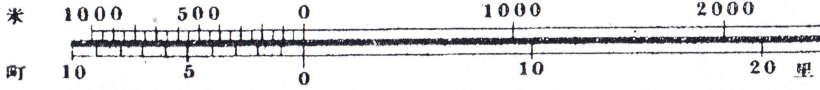
【謝辞】

今回も大滝会 HP 管理人紺野文英様には写真編集で大変お世話になり、また鉾山関係の貴重な情報を提供していただきました。大滝会木村義吉会長をはじめ役員の皆様にはご多忙中にもかかわらずヒアリングに快く応じて頂きました。青葉学園様にはたんぼぼ館の見学や資料を提供(『50年史』転載等)していただきました。文末ですが皆様に心から御礼申し上げます。

次ページに「巻末参考図」を添付

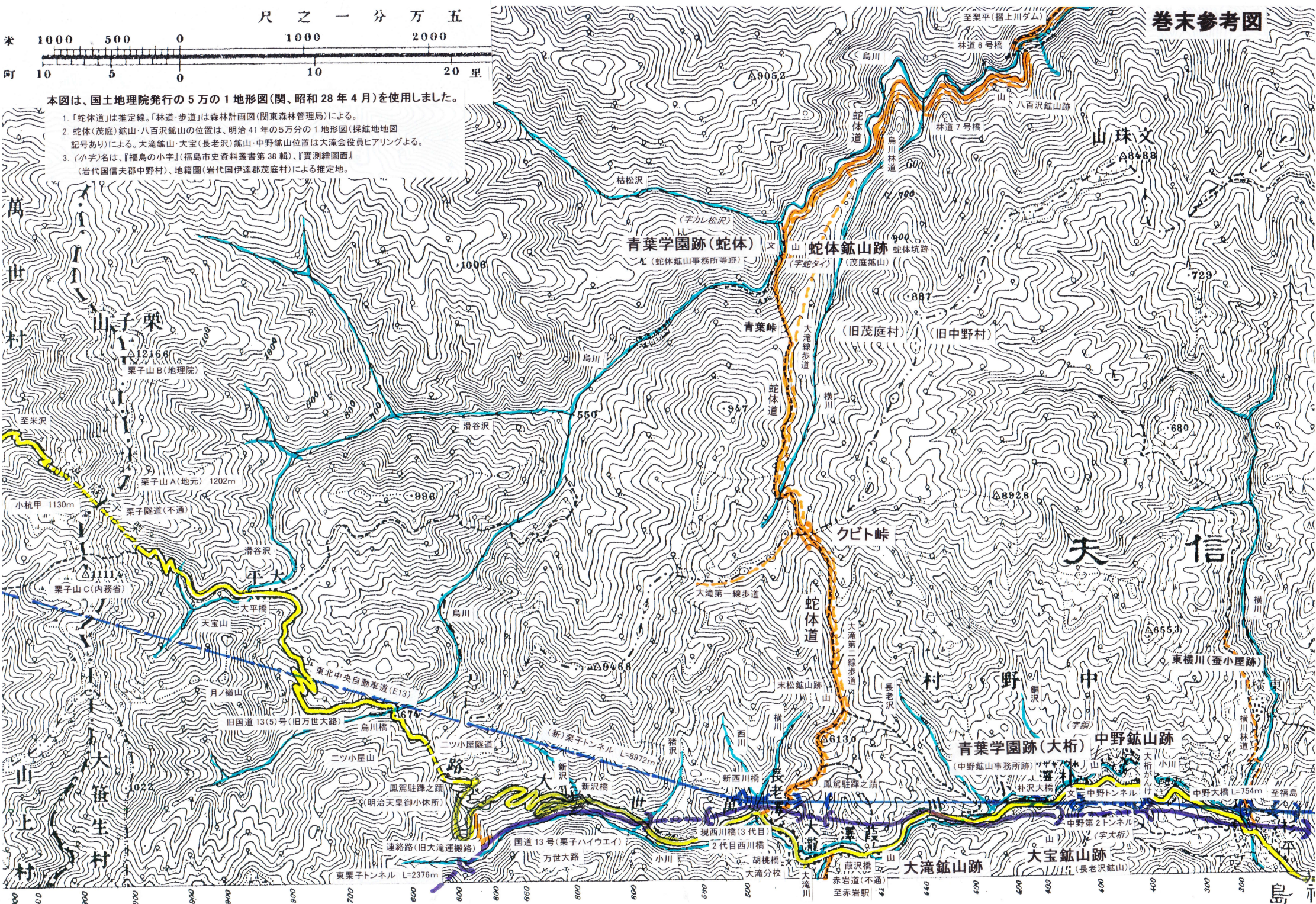
- [別添解説資料に続く](#) -

尺之一分万五



本図は、国土地理院発行の5万の1地形図(関、昭和28年4月)を使用しました。

1. 「蛇体道」は推定線。「林道・歩道」は森林計画図(関東森林管理局)による。
2. 蛇体(茂庭)鉱山・八百沢鉱山の位置は、明治41年の5万分の1地形図(採鉱地地図記号あり)による。大滝鉱山・大宝(長老沢)鉱山・中野鉱山位置は大滝会役員ヒアリングによる。
3. (小字)名は、『福島の小字』(福島市史資料叢書第38輯)、『實測繪圖面』(岩代国信夫郡中野村)、地籍圖(岩代国伊達郡茂庭村)による推定地。



萬世村
大笹生村
山上市

信夫
中野村
大滝

0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900 2000 2100 2200 2300 2400 2500 2600 2700 2800 2900 3000